
君、竜の咆哮を聞け。

井口亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君、竜の咆哮を聞け。

【NZコード】

N1941BA

【作者名】

井口亮

【あらすじ】

靈歴一八六三年夏、龍元のダーザルゲッガ島空襲に端を発した第一次精霊戦争末期、龍元は北領をアルメリア共郷国に奪われ敗戦を迎えるとしていた。だが、一八六五年の冬、療養除隊していたダーザルゲッガ島空襲、ダダガルザ諸島激戦のエース『銀翼』の竜靈『銀嶺鱗・由露葉』とその竜靈剣護『浪代辰貴』が志願し、北領守護隊に配備されたことから、その敗戦のシナリオは大きく転換することとなる。第一次精霊戦争末期、北領の空を駆ける練装飛竜『銀戒』と『竜誇飛竜部隊』が迫る、敗戦の軌跡。

序幕　『東宮大空襲』

鈍の空から振る冷たさが、雪だと知るのに幾ばくかの時を必要とした。

灰色の緞帳に覆われた空は、はらはらと雪を舞い散らせる。

由露葉はしばらく惚けたように空を見上げ続けていた。

まさかよもや雪を再び見られるとは思わなかつたからだ。

「……寒いな」

隣で同じように空を見上げる辰貴が白い息を吐きながら呟いた。

空を映す瞳は濁りきつた光を称えている。

目を水平に落とせば、そこには街の無惨な残骸が横たわっていた。幼子が親を求める声、子が親を捜す声、そして、探すべき者の姿を見て泣き崩れる声が遠く聞こえる。

惨状といえば、惨状だった。

生氣を失い、寒空の中、道の傍らに蹲る者、負傷してなお歩き力尽きて倒れる者、そして、僅かな食料を奪われて殺される者。

桟敷の下で物乞いのように風雨を凌ごうとする者、倒壊した家屋に押しつぶされた者、焼けこげた四肢のみをこの世の痕跡とした者。焦げついた臭いにほのかに香る死臭も、時が過ぎればあたりを支配するのだろう。

由露葉は恐ろしさを覚え、辰貴の袖を掴む。

一人は瓦礫を踏み越え、昨夜の空襲警報が響く前までの寝床だった場所に赴く。

東宮大空爆が後の世に東宮一帯を焼け野原にした史実に残る飛竜部隊を用いた大空襲であり、『東宮に破壊を免れた建造物は大龍府のみである』と記述される。

この記述に偽りはなく、一人が幾ばくかの時を過ごした家屋も跡形もなく焼けていた。

黒く焦げ、しづんだ木の支柱が灰材の中にいくつか傾き、立ち並

ぶだけだつた。

「どう、しまじょうか……」

由露葉が途方に暮れて尋ねる。

雪がちらほらと積もつてきている。

外套の襟を立て、由露葉を抱えながら辰貴はこれから身の振り方を考えねばならなかつた。

龍元の冬は寒い。

雪の降る寒さの中、寒風に身をさらしていれば寒さにやられて死ぬだらう。

粗末な避難所が設けられているのが見えたが、とてもではないが全ての罹災者を受け入れることはできまい。

糧食の配給を待つ人の列ができているが、おそらく彼ら全員の胃袋が満たされる量が配られるはないだらう。

日が傾けば本格的に襲つてくる寒さにやられる人も多くなる。

「……持つていけるものは、持つていこう」

辰貴は残骸の中から捨てる物を拾い、ともかく移動することを決めた。

由露葉も辰貴に習い白い顔と手を煤で汚し、倒壊した家屋の柱を起こしてゆく。

僅かに蓄えていた糧食の備蓄を持つため、床の下の土に埋めておいた瓶を掘り起こす。

中には塩と米があつた。

それだけで悟れるだけ、人の飢えた感性といつのは鋭いものである。

飢えた目で見つめてくる人間の視線があつた。

唾を飲む音が聞こえる錯覚を覚える。

どこでも一緒だ。

由露葉と辰貴はそれらの視線を受けて思い出したくもないとを思い出してしまう。

その時、そうしたように彼らを威圧の目で睨み武器となる物を手

にする。

餓鬼に落ちた人と相対するため悪鬼とならねばならねば自らが朽ちる。

誇りや虚飾は腹を満たさず、人としての尊厳は元来持ち合わせるべき獸性の前には無意味であることをよく知っていた。

「ねえ、おじちゃん……おなか空いた」

年端もいかない子供が施しを望む瞳で見上げてくる。

昨日まで隣に住んでいた子供だ。

罹災し親とはぐれたか、あるいは。

由露葉は施しをしたくなる衝動をぐつと抑えて瓶を抱える。

「失せろ」

辰貴は押し殺した声でそう告げ、手にした廃材を振るう。幼い子供を容赦なく打擲し、周囲への見せしめとする。子供の悲鳴が耳を焼き、また、心が乾いてゆく。

辰貴が振るう暴力を諫めない自分もまた、彼と同じなのだ。泣きながら慈悲を請う子供の視線を痛く思い、うつむく。だが、そうして何かに申し訳なさそうにすることは酷く卑怯であることを覚え、由露葉は唇を噛むと冷酷の能面を被ることにした。昨日まで親しげな顔で接してくれた隣人が恐怖と怨嗟の混じった嗚咽をあげて睨んでくる。

鼻を鳴らし、逃げるようその場を去る。

俯いた顔に僅かに落ちる影は誰にも見られることはなかつた。

生きて行くために彼らはいざれ徒党を組むだろう。

徒党を組まれば、簡単に奪われる。

そのことも一人は良く知りすぎていた。

そして、最後にどのように振る舞うかも。

翌日、二人の姿が東龍宮佐瀬駐屯所にあつた。

ダダガルザの銀翼、再び空を飛ぶと知る人は喜んだ。

そして、英雄は再び英雄に祭り上げられることとなる。

がしかし、それはただ、地獄を経験した者が市井に落ち、食い詰めて、生きるために選んだ苦しい方法でしかなかつたというのが眞実だ。

大二次精靈戦争末期、龍元という国はアルメリア共郷国に北領本土の蹂躪を許し、その國士全てを爆撃可能圏に納められ、安全な場所などどこにもなかつたのである。

龍元を救い、歴史の闇に葬られた第一次精靈戦争末期の英靈、『竜誇飛竜部隊』はまだこの時、存在していなかつた。

序幕　『東宮大空襲』（後書き）

書きかけの作品なので、不定期連載となります。
途中、用語の統一が見られないこともあるかもしませんが、後
で直します。

第一次精靈戦争。

後の歴史家はこの戦争をそう称する。

軍事評論家はこの戦争を航空戦力の意義を明らかにし、戦争の在り方を変えた戦争と定義し、歴史家は人の精神が古い神靈から解放されたと解く。

そして、経済学者は経済活動の多くがより物質的な充足を求め始め、先進者は金銭的価値に重きを置き経済が停滞し逼迫することを解いた。

世界の歴史がゆるやかではあるが、大きな転機を迎えた。

一つの戦争が引き起こされるまでに様々な経過を経て、その過程で数多くの原因が生まれるようになり、第一次精靈戦争が発するに至るまでにも様々な理由がある。

それらは最終的に戦争が経済活動の一環であると言われるようになり、経済の観点から見るのが一番、理解しやすい。

開戦に至る理由をそれらの理由を交えて国際上の立場の上から見ていくこととしよう。

確執は古く遡り、今は世界地図から名を消したユーファン帝国の打ち立てた大靈誓約がその発端となる。

一大勢力を誇ったユーファン帝国は近隣諸国を最も進んだ魔導技術と強力な軍事力を背景に植民地、または自国の領土としてゆく。

占領した土地の通商を押さえ、また、ゆくゆくはユーファンへと帰化させるために、そして国際的支持を受けんが為に大靈誓約を現界連合の場でユーファン主導で打ち立て各國に批准を求めた。

精界 この呼称は当時のユーファン帝国のもので靈界や玄界などその土地柄で呼称がことなるが、それぞれ同じものであると現界に座するあまねく精靈を共敬し、人靈皆が潤恵を授得せん。

この趣旨と各國協調を建前とし、現界連合でのユーファン主導の

現界政治を執り行つべく大靈誓約への批准は着々と進められる。

それらの施策は様々な障害があつたにせよ概ね滞りなくユーファン帝国の思惑通りに進んだ。

理由は大きく二つあり、一つ目はユーファンの強大な軍事力を背景とした恫喝、二つ目は現界各国に大靈誓約の建前に同調できる宗教的下地があつたからだ。

多くの宗教が時の権勢を盤石とするための喧伝であり、一つの価値観を普及させるのに大きく貢献するものとして存在するものである以上、価値観を同じとする大靈誓約について当時の情勢はこれを受け入れる準備ができていた。

或いは、受け入れられるように作られていた。

そして、最も切実な話として各国が靈息魔術から精靈魔術を用いた魔導技術を普及させるべく時代が転化していく時期でもあつた。

ユーファンは従属する国には惜しみなく技術供与をするとともにその支配を盤石なものとし、敵対する国には大靈誓約でもつとして経済制裁を容赦なく加えた。

時の帝王ユーファン？世はその時代の趨勢を汲むことのできた希代の外交政治家でもあつたのだ。

東に遠く離れた孤島である龍元はその国の興りが「龍靈、現降り八綱を翼に掩いて宇と成さむ」と説く、靈獸である龍が人となりその国を導くという宗教基盤を持つていたことからして、また、立ち後れた経済戦争に勝つ為、大靈誓約を拒むことなく受け入れた。

ここで龍元の歴史についても触れねばならないのだが、龍元は大靈誓約直前まで他国との関係を断ち、独自の文化と治世を敷いていた時期がある。

が、長く続いた平穏は制度自体に腐敗を加え、大きく世界の列強から立ち後れる形となる。

内部的腐敗と外敵に対しての危機感等の様々な要因が引き金となり、その国政を改める内乱を経て改革が起こった。

その後、龍元は勤勉な精神性を有したまま、ユーファンや他の列

強から貪欲に国家運営の全てを吸収し、力を蓄え始める。

地理的にユーファンから広く大茫洋を隔てており、地理的にもその支配が強くなかったことが幸いし、通商規制を受けることなく着々と国力を蓄えることができた。

その際、極東の周辺国からは独自の精神性を捨てた俗国と、列強から竜真似する魚と揶揄されたものであるが、時代の波に取り残された龍元にとつてはユーファン等の列強から学ぶことが変遷していく国際情勢の中で生き残る術であった。

そして、起こったのが第一次精靈戦争である。

事の発端はユーファン帝国の植民地であったアルメリアが独立を表明したことであった。

全ての原因を列挙するには暇が無いが発するに至る原因は二つある。

技術革新による供給過多と貨幣選良主義がデフレを生み、混乱した経済により国力を著しく落としたユーファン帝国が植民地に対し過大な関税をかけ、不平不満を蓄積したこと。

そして、アルメリアがユーファンの技術供与を受け精靈技術を発展させた練装技術の開発実用に至つたことが大きなものである。ユーファンの境界での霸権を快く思わない強大国と同じようにユーファンからの独立を望む植民地の蜂起に瞬く間にユーファンの領土は減衰し始める。

はじめは、アルメリアの独立を認め、ユーファンがその霸権国としての地位を放棄することで決着がつくと思われた。

がしかし、アルメリアの練装靈獸部隊が強すぎた為に、ユーファンはアルメリアに取つて変わられることとなる。

それだけではなく、アルメリアは周辺諸外国の領土も奪い、ユーファン以上の国土を有するようになりそのまま霸権国と成り代わってしまう。

その混乱に乗じて、もう一国、練装靈獸を軍備に実装した国があつた。

東の小国、龍元である。

龍元は『龍靈』と呼ばれる特権階級による意志決定の遅さという政治的欠陥の為に機を失したものの、強大な軍事力を持つに至った軍部の独走により月州やテテ諸島等をその領土とした。

アルメリアが霸権国となつたことで第一次精靈戦争は一応の終結となつた。

こうして、世界情勢を大きく覆したアルメリアはその名を『アルメリア共郷国』とし、霸権国として現界連合を引っ張る形となつた。ユーファンが大靈誓約を用いて各国を従属させた例に習い、戦勝処理を終えたアルメリアは新たに『靈長憲章』を打ち立てる事となる。

『あまねく精靈の呪縛から解き放たれ、人は真に精神の自由を得なければならない』

それは今まで尊いとされてきた精靈を隸属させる魔導技術の変革に伴つた思考であり、宗教であつた。

だが、それを拒む国もまたあつた。

龍の靈たる竜靈をその支配階級に置き、その支配を盤石とする宗教の要にした龍元。

そして、アルメリアの霸権をよしとしない国々。

それら『精靈同盟』とアルメリアを中心とした『人現連合』。

龍元のダーザルゲッガ島空襲に端を発した第一次精靈戦争の火蓋は切つて落とされた。

靈歴一八六三年の夏に端を発した第一次精靈戦争は一八六五年の冬を持つとしても終結を見なかつた。

いや、終結の予想はあらかたついてはいた。

先制攻撃を仕掛けた龍元が大茫洋で優位に戦局を展開していた。

それに大きく寄与したのが練装飛竜部隊による爆槍投下戦術である。

これまで大海獣による海上戦と、地上部隊による火力戦が戦闘の

趨勢を決していたものであるが、航空戦力という概念が加わったのである。

正確には第一次精霊戦争の時にも航空戦力というものは存在した。練装天馬部隊を使用した索敵、爆撃等の戦術は採られ、それが効果的であることは実証されていた。

だがしかし、それらはあくまで陸上部隊の進行を支援する範疇での運用であった。

その常識を覆したのがダーザルゲッガ島空襲であった。

練装した竜に搭載した魔槍でもってダーザルゲッガ島に集結した第一三アルメリア海竜団が全滅した結果をもつてして、アルメリアは戦略の基本方針を航空戦力に比重を置くことを決めた。

だがしかし、それだけの決定的打撃を与えていながら、龍元は第一次精霊戦争で力を持った陸軍と海軍がその有用性を認めながらも独立した権限を与えたかった。

熾烈を極めたダダガルザ諸島攻防戦において、ようやくその有効性と時代が戦術の転換を認識し、その開発、生産に龍元が着手したころにはアルメリアはすでに航空戦力を整え終わりつつあった。あとは、物量に劣る龍元がアルメリアに押し切られるのにさほど時間はかからなかつた。

そして、靈歴一八六五年九月一日、アルメリアは北の同盟国フロラッズイを牽制しつつ、龍元本土である北領に上陸した。

最早、この戦争は龍元、アルメリア、フロラッズイの三国が『どのような形で戦争を終結させるか』が問題であったのだ。

『冬が来れば、敵は寒さに耐えきれず撤収する』
その撤収を待つて果敢に反撃すれば勝てるというのが龍元政府
龍府の流した喧伝だった。

北領に向かう輸送飛龍『雲龍』の中でしきりにその喧伝を吹聴する新兵を振り返り、操縦席で辰貴はため息をつく。
まだ、成人はしていない少年すら兵士へと駆り立てて戦争をする國の未来が見えないほど、辰貴は盲目ではなかつた。
彼らとて、そのことは薄々理解しているのだろう。
だが、安っぽい喧伝とわかつていながらもそれにすがらなければ恐怖に負けてしまいそうになる自分を鼓舞するにはそうとわかつていても唱えなければいけない。

耐えられなく、なるまでは。

「そろそろ堅津海峡です」

計器を睨み精息を調息していた由露葉が辰貴に告げた。

「雲泳飛行に入ろうか」

北領は敵の航空勢力圏内である。

航空勢力圏内であるということは即ち、敵の海軍力が及ぶ地域であり運搬飛竜である雲竜の場合、為す術もなく誘精矢の餌食となる。少なくとも雲の上に出れば敵の哨戒蛇の索敵を躲せる可能性がある。

雲竜は雲の中を泳ぐように飛行する。

あまり、高く飛行しても敵の飛竜に発見される恐れもある。雲の中を飛ぶのが一番、発見はされづらい。

また、雲には敵の索敵術式　精策を躲せる効果もある。

生物に備わる靈素に対し、精靈をぶつけて感触を手繰る策敵方法であり、第一次精靈戦争中に実用された索敵方法だ。

これにはいくつか欠陥があり、精靈が密集する場所　水靈の住

む水中や雲、火靈が顯現しているとされる火炎など があれば精靈は通過できず索敵しづらいという難点も抱えている。

雲の中を飛行する、というのは同時に龍の場合、飛行するために必要な風精を継げないという難点も生じる。

飛龍の場合、飛翔するのに竜肺と呼ばれる竜体に下部に練装した肺に精息を込めて、火靈を発生させ肺気口から風靈とともににはき出し推力を得て、翼に風靈を従わせて飛翔する。

水靈の濃い雲の中では火靈が起こりづらく、また、風靈も少ない。そして、雲の中に入ると龍眼から送られる映像が白く染まる。時に、どちらの方向に飛翔しているのかわからなくなるのだ。

そのため、非常に不安定な飛行となり、長時間の飛行には適しては居ない。

だが、それを可能にするのが『竜靈手』の存在だ。

『竜靈』と呼ばれる高度に教練された精靈士が竜隨に干渉し、精靈比を調整し困難な飛行を可能にする。

兵竜 飛竜、地竜、海竜の練装された竜の総称 は『竜士』と呼ばれる操縦士があり、そして、選ばれた兵竜に『竜靈手』が座すこととなる。

『竜靈』とは『龍靈』 即ち、龍の靈を受け現界を執する靈とし人の身を持つ龍の化身であり、人の身である竜士より尊い存在であるからである。

人の戦は人の手で行うべきであるが、龍はその身魄を人に貸し与え、靈魂は人の横にあり、戦場を共にし血を流す、故に龍義に反すは人に非ず。

つまりは、『龍靈』が戦場に立たないことを非難されたくないが為、『龍靈』で家督を継ぐことのできない子息が人と共に戦うこととしたものである。

だが、竜靈が学ぶこととなる九頭竜学府でもつて龍元最高の教育を受け、専門の式術 魔導の龍元での呼称 を学んだ竜靈はその式でもつて高度な兵竜操作を可能とした。

銀嶺鱗・由露葉はその『龍靈』であり、浪代辰貴は由露葉に仕える『竜士』である。

ダーザルゲッガ空襲、そして、ダダガルザ諸島攻防戦で飛竜士として過ごしてきた二人にはそれでも難しい雲中飛行ではなかつた。

「浪代竜士は陸竜隊の出身でありますか？」

年の若い兵士が貨室でのお喋りに飽きたのか操縦席の辰貴に声をかけてきた。

屈託の無い少年だつた。

年の頃なら一八、九だろう。自分とさほど変わらない。

自分が飛竜兵となつたのが一七歳であつたことを考えると、長い時間を過ごしてきたようにも感じた。

「いや、海竜隊の出身だよ」

「では、ダダガルザ攻防戦には？」

「ああ、元々は第03海竜隊の『富岳』に居た」

「『富岳』では『紅閃』に？」

「いあ、『黄炎』だつた。『紅閃』に乗るはずだつた由露……銀嶺鱗御竜の竜士が事故で亡くなられてな。『黄炎』の複座を急遽練装して運用していた」

『紅閃』、『黄炎』はともに龍元の主力飛竜である。

『紅閃』は竜靈手用の複座型、『黄炎』が単座の通常竜士用である。

辰貴はそのいすれも操縦経験があつたが、『紅閃』についてはあえて黙つていた。

「私も今度、北領で『黄炎』を預かる予定になります。先達のご指導を頂ければ幸いです！」

少年兵は感極まつたように声を高める。

辰貴は色々迷つた挙げ句、当たり障りの無いことを答えた。

「アルメリアの飛竜は竜剣の射程内に入ると回転して剣先を外してから大きく左に旋回して避けようとする。回転し始めた時から心持ち剣先を左に向けておくといい

漏らすまいと真摯に聞く瞳を向けられて、辰貴は自分がかつて持つていたものを見て苦笑した。

その様子を見ていた由露葉がほんの僅かに微笑んだのを見て、ばつの悪そうな顔をする。

「浪代竜士は北領でも飛竜に？」

「……田をやられてな。飛竜は無理だ。雲竜ならまだ乗れるが……」

「戦闘は難しい」

辰貴は嘘をついた。

もう、戦場の空を飛びたくない。

がしかし、それを今、国防の志に火を灯す若い兵士に告げる訳にもいかず用意していした嘘をつく。

若い彼らを死地に追いやり、自らは安全な後方任務につくことに罪悪感を僅かに感じたが、それは無理矢理胸の奥に押し込んだ。

辰貴が死地に居た頃に、彼らは安全な場所に居たのだ。代わつてもらつだけだ。

そう思いこむことにした。

苦々しい顔を見られたのだろうか。由露葉の表情が曇る。

「死して竜義に応じて、竜誇とせん。頑張ってくれい」

「はい！」

吐き気のする喧伝を口にした辰貴の顔を見ることなく少年兵は貨室へ戻る。

「自分は典藤勝磨と申します！ 北領でも機会があれば！」

名乗らんでもいいものを。

辰貴は胸中でぼやきながら手を振った。

由露葉が横で沈痛な面持ちで俯いていた。

「由露葉……」

「違います……哨戒機がいます」

由露葉が竜隨珠に当たる手を振るわせて呟いた。

「聞こえるのか？」

竜靈手は竜隨珠を通じて竜の感覚を得ることができた。

雲泳飛行をする場合、視界を塞がれた竜の感性は耳だけになる。

「正面、機数一……距離四八〇〇……この肺音…『ワイバー』です」

「巻き雲が見つかつたらおしまいだな」

巻き雲とは雲泳飛行をする竜が残す雲の乱れである。

火靈と相克する水靈が火靈を追いかけ竜に追いすがり、巻かれる雲の形狀からそう呼ばれる。

僅かに逡巡する。

定石では下降し、雲の下を飛ぶことで巻き雲が起ることを避けてやり過ごす。

だが、航海戦力が居た場合、間違いなく発見される。

可能性の問題だった。

本土と北領の間に広がる堅津海峡まで敵の海上戦力が展開してい可能性は少ない。

「降りる」

辰貴は操竜桿を引き上げ、雲竜を降下させた。

静かに首を降ろし、降下していく雲竜の瞳が海上を捕らえる。

「……辰貴ッ！」

由露葉が悲鳴のように小さく叫ぶ。

貨室の新兵が何事かと操縦席を覗き込もうとする。

「何があつたんで」

「発見された！近な物に掴まれッ！」

「どしゅん、と大きく空気を震わせ海を割つて熾光が进る。

淡い緑の熾光を従えて飛来するのは精靈誘導式魔槍 精誘槍だ。大気を切り裂く甲高い音を立てながら緩やかな弧を描く精誘槍が光の粒子を散らしながら飛翔、上昇する。

辰貴は竜操桿を横に倒すと、足板を踏み込む。

急激に傾いた雲竜が横滑りするように急に高度を落とし加速する。翼の先端を精誘槍が抉り、激しい炸裂音が響く。

砕け散つた翼の練金装甲が飛び散り、雲竜が衝撃で横転する。

いや、横転するように操縦したのだ。

「わああ
」

悲鳴の上がる雲竜の中で、翼が折れる衝撃を機体を何度も横転させて逃がす。

貨室の中が激しく物の打ち合つ音で響き、肉の碎ける音がする。由露葉が必死に竜肺の推力を調整し、均衡を保つ。

綺麗に横転を繰り返し、再び水平を保ち、辰貴は眼前の海を睨んで唸つた。

「リヴァイアサル級つ……」

水面から僅かに背面の装甲を見せる練装水龍の姿が白い飛沫を上げていた。

全長200間はある巨大な潜水龍である。

鋭角的な練金外装は水霊の抵抗を受けやすいが鱗状に設けられた外殻が魚のヒレと同じ役割を果たし、結果、水中での取り回しを良くする。

背面に対空精霊誘導槍発射管6門、側面部に対衝撃殻を張り巡らし、六対一一本の竜脚にそれぞれ水精誘導三叉槍を備えている。大注水口を兼ねる龍口部には4号級竜咆哮を備えるリヴァイアサル級潜水竜は数多くの龍元海竜を屠ってきた。

「次撃、来ますっ！」

「『折る』ぞ！」

残り四本の精誘槍発射管が開き、緑の燐光が弾ける。燐光を吹き上げ上昇する爆散槍が雲竜に迫る。

雲竜の後部から誤誘火光精が放出される。

火靈探知型の精靈誘導槍が誤精に引っ張られるように軌道を変える。

残った音精誘導式の精誘槍を雲竜は『翼』を根本から逸らして落下することで避けた。

雲竜が居た場所で交錯した精誘槍が緑の光から紅蓮の炎となつて爆散し、激しく空を震わせる。

翼を折り、落下する形となつた雲竜ははためかせるように翼を広げ、肺気口を爆発させるように風火精をはき出し、風精揚気を得る。

『逸翼』と呼ばれる飛行方だ。

精誘槍を放ち切つた水龍が海面から顔を覗かせ、口腔から空に向けて竜咆哮を放たれる。

安定しきる前に無理に機体を傾け、ぎしぎしと雲竜の練金装甲が軋む。

貨室で響く悲鳴を躊躇する暇も無く辰貴は竜操桿を手繰り、機体を安定させる。

リヴァイアサル級の攻撃を避けきつた矢先だ。

上空に抜けた精誘槍を見た飛竜が雲を抜けて現れる。

「ワイバーン、引き返して来ます！会敵ツ！」

「浪代竜士　！」

新兵が何かを訴えようとするが、それに構つている暇はなかつた。

肉眼でワイバーンの竜影を捕らえる。

双発式竜肺と可変後退翼式の主翼と背面にある一枚の背角が特徴的な機体で、一対二本の竜足にそれぞれ三本ずつの精誘槍を抱えている。

竜角に火精竜剣、竜顎に一号竜咆哮を主兵装として持つ第一次精霊戦争末期に登場したアルメリアの主力戦闘飛竜だ。

自衛用の竜剣を一振りしか主翼に持たない雲竜では相手になるものではない。

「雲の中に逃げ込む」

猛禽が獲物を見つけたような獰猛さでワイバーンが雲竜に肉薄する。

竜角にしつらえられた竜剣が赤く光を放ち、震える。

放たれた火精弾頭が大気を切り裂き火線を作つた。

雲竜の背中をいくつかが貫き、火を噴き貨室で悲鳴があがる。

上下に交錯したワイバーンから逃げるようすに高度を取り、雲の中に飛び込む

追つてワイバーンが雲の中に入り、雲竜を追つ。

雲の中といえど、全くの無視界ではない。

肺気口からはき出される精炎の光や、減衰した精策波で索敵が可能なのだ。

ワイバーンがぐるぐると周囲を回り、雲竜を探す。

風精を継ぐ為に雲の上空に浮かび、そして、巻き雲を見定めてその進行予測先に降下する。

そして、竜剣の火弾をはき出しては雲竜を削る。

辰貴は雲の中で飛竜を横に滑らせ火弾を逸らし、由露葉は肺気口からはき出される精炎と精靈比を調整し、限りなく失速するギリギリの領域で機体を制御する。

「……小南田ツ！しつかりしろ小南田ツ！」

貨室で混乱し悲鳴を上げる連中に気を持つていかれそうになる。自分も喚くことができればどれほど楽かと思い、憎く思いながらも由露葉は辰貴を見た。

辰貴は静かな目で竜眼から見える敵の姿を監察していた。

雲竜とワイバーンの違いは低速域での揚気安定性である。運搬用飛竜の雲竜はその特性上、広く主翼を広げており、戦闘飛竜であるワイバーンは比較して小さい。

高速域はワイバーンに圧倒的な軍配があがるが、低速域では雲竜の方が安定する。

雲竜の最低速度を下回る速度で飛行すればワイバーンは揚気を失い失速する。

ワイバーンは攻撃に失敗すれば旋回し、再度、後ろや前から攻撃位置を取り直さなければならない。

圧倒的に不利ではあるが、機会はそこにしかない。

辰貴は粘つゝ睡を飲み下すと、雲の上に出る。

「被補足！槍！」

「逸らす！」

頭を出した雲竜めがけワイバーンの精誘槍が放たれる。

瞬間、翼を置んだ雲竜が雲の中に沈む。

上空を通り抜けようと/or>する、ワイバーンの腹が見えた。

躊躇無く竜剣の引き金を引く。

放たれた火精が雲を破りワイバーンの片肺を貫き、破つた。零れ出る精光が黄緑の光を散らし、追つて精炎が破れた穴から伸び上がり練装を焼く。

「下、もう一尾！」

気を配っていたツモリだつた。

雲の下から攻撃しようとした上昇してきたワイバーンと交錯する。

ワイバーンの竜士　　アルメリアでは竜騎兵と呼ばれる　も、雲竜が翼を置んでいるとは思わず、降下速度を誤り攻撃の機会を失する。

雲を抜けて翼を広げ、激しく精炎をはき出し均衡を取つた雲竜はそのまま再び雲の中に飛び込む。

「え、あ！…真上っ！」

宙返りして再度攻撃しようとしたワイバーンと雲の中で再びみえる。

竜咆哮が煌々と紅蓮の炎を含み、吐き出されるとされる。

「きやあああっ！」

由露葉が悲鳴を上げ、目を瞑る。

貨室が兵達の悲鳴で埋め尽くされ、辰貴は恐怖の中で操竜桿を倒した。

吐き出された竜咆哮が赤黒い炎となつて雲龍に迫る。

その場で横転を始めた雲竜の腹を焼き、交錯しようとしたワイバーンの首を横殴りに、雲竜の翼がへし折つた。

同時に雲竜の翼がひしやげ、折れる。

上空に抜け、遅れて海面に突き刺さつた竜咆哮が盛大な水柱を上げ、追いかけるように首を折られたワイバーンが墜落してもう一本、水柱を作つた。

計器類が滅茶苦茶な動きをし、機体がぱりぱりと震える。

それでも操竜桿を手繰り、速桿を押し込み機体を安定させようと/orする。

「由露葉！精靈比！繰り返し逸らせる！」

辰貴が叫ぶが、恐慌に陥った由露葉が正気を取り戻すことは難しかつた。

気の遠くなりそうな時間だつた。

何度も何度も翼を置み、広げる。

文字通り、羽ばたいて均衡を取ろうとしていたのだ。

「飛べつ！飛べ！くそつ！飛べつたら飛べよつ！つガああアツ！」

片翼が半ばから折れた状態では速度比を誤れば即座に均衡を崩す。

「怯えないで！竜がつ！この子がつ！」

由露葉が泣きながら叫ぶ。

竜肺口から吐き出される精炎を速桿で操り、竜鎧で偏向膜を休むことなく動かす。

そうして、不格好なまでに空を飛び続け、雲を抜けた先に見えた。

龍元北領。

第一次精靈戦争でダダガルザに次ぐ、激戦地である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1941ba/>

君、竜の咆哮を聞け。

2012年1月5日21時45分発行